

祖父から受け継ぐ私の夢

神奈川県立相原高等学校 畜産科学科 3年 猪野 凌矢

私の祖父は酪農発祥の地である千葉県最南端の南房総市で酪農を経営しています。祖父は50年前に一千万円の借金をしながら牛2頭から酪農を始めたこと、地域の酪農仲間と共進会に出るのが何よりの楽しみだったことなど、笑顔を浮かべながら私に毎日話してくれました。そんな私は幼いころから牛が大好きで、あの大きな体ときれいな瞳に魅了されていました。お盆やお正月など祖父の牧場に行っては子牛の哺乳や牛のエサやりをするのが何よりの楽しみで、家に帰りたくないと一晩中泣きわめいていたほどです。それほどまでに牛好きな私でしたが、牛への興味があるばかりで酪農家になりたいなんて考えもしませんでした。そんな時でした。中学生の夏、私が牛舎に行くと「みんな牛飼いを辞めちゃうなんて寂しくなるな」と悲しそうな表情でしゃべる祖父を目にしました。私は今までここまで落ち込んだ祖父を見たことがありません。どうしたのか尋ねると、昔からの酪農仲間が経営難を理由に次々と離農してしまっただけらしいのです。実際に祖父の牧場も祖母が体を壊してしまったため、祖父一人で24頭の牛と2ヘクタールの畑作業を行っており厳しい状況です。このままでは祖父の牧場も時間の問題です。これを聞いた私は、祖父が築き上げてきた牛達やこの場所を祖父の後を継ぐことで守らなければならないと使命感を覚えるようになりました。それから私は祖父のためと猛勉強の末、神奈川県立相原高校畜産科学科に入学。相原高校では畜産部相原牛プロジェクトに所属し365日牛の飼養管理を行い、自分たちで作った牛乳や野菜を地域に販売しています。そんな私は販売活動をしていく中でお客さんの「ありがとう」や「また来るね」という言葉がとても嬉しく感じ、将来は地域に根ざした牧場を開きたいと考えるようになりました。そして高校卒業後は祖父の牧場に就農し、牧場経営を手助けするという夢を持つようになりました。夢に向かって勉学に励むことができ高校生活はとても充実しています。そんな充実した日々を送りながらも畜産科学科で勉強を重ねるにつれ牧場経営の問題点がみえてきました。その中でも祖父の牧場でも問題となっている子牛の下痢が多発していること、それに伴い子牛の販売価格が低下していること、労働負担が大きいこと、ヒートストレスが多いこと、これらを改善する必要があると考えました。

最初に子牛の下痢発生の改善策として発酵乳づくりに取り組みました。発酵乳とは保存性を高めるため牛乳をヨーグルト状に乳酸発酵させたものです。子牛の哺乳には現在、代用乳という粉ミルクが使われており、哺乳代は一頭当たり32000円と年間16頭の子牛が生まれる祖父の牧場では大きな負担となっています。そこで、乳質が悪く廃棄される牛乳を発酵乳として給与することで哺乳費用が削減できると考え、昨年の夏から学校で生まれたホルスタイン雄牛2頭に給与しました。その結果1頭あたり13000円削減することができ、年間およそ

20万円の削減に繋がります。さらに乳酸菌の働きからか子牛の下痢も激減し子牛が大きく育ち、実験で使った牛は市場価格の倍で売れるなど大きな成果となりました。

また、飼料費削減として、祖父の牧場がある南房総市で生産が盛んな菜の花の花部分収穫後の余ってしまった茎部分を利用したサイレージ作りに取り組みました。菜の花のサイレージ化を導入する事ができれば菜の花農家さんと連携し飼料費削減が可能であるとともに経営拡大の一手になると考えました。問題点となった水分量の多さと鎮圧による糖分の流出もビートパルプを添加することで流れ出る糖分を補充することができるため問題点を解決することができました。完成した菜の花サイレージは嗜好性も高く飼料費削減に繋がり経営に役立つと確信しました。

次にヒートストレス防止のためミスト散布機の導入に取り組みました。祖父の牧場が位置する南房総市では夏場30度を超える日が殆どでありヒートストレスによる被害は甚大です。そのため扇風機による強制送風や風通しを良くするため窓を取り外すなどの暑熱対策を行っていますが、夏場の採食量低下や乳量減少は顕著に表れており、この問題を解決すべく学校でミスト散布機による導入を行いました。すると、扇風機のみでは夏バテが多く発生していましたが、ミスト散布機の気化熱を利用することで乳量低下や夏バテを抑えることに成功しました。

これらを祖父の牧場で導入し飼料費の削減と子牛価格の向上、ヒートストレス対策を行っていきたいと思います。今後の展望として、南房総市のコントラクター事業へ加入しそこで製造されているTMRの給与を開始、それによる乳量向上、預託育成牧場の利用による労働力削減を行い、規模拡大を目指していきたいと思います。また、祖父を支えたいというのは私だけではなく家族みんなが思っています。いずれは調理師免許を持つ叔父と栄養士の資格を持つ叔母と協力し、生産から加工、販売までを行う六次産業化を確立し、より安定した牧場経営を家族一丸となって目指していきたいと考えています。実際に南房総市で六次産業化を行う須藤牧場では、乳搾り体験やバター作りなど酪農体験イベントを通して酪農の魅力を消費者に伝えています。さらに自家製のアイスクリーム等の販売も行っており私の目標とする六次産業化を確立している私の理想とする牧場です。私が幼い頃祖父の牧場で牛の魅力を知ったように、体験する事の楽しさを消費者の方々にも学んでもらえるような地域に根差した牧場を作っていきたいと思います。

去年の夏、祖父の高齢化により手が回らなくなり、牛3頭を泣く泣く淘汰しました。その中には私が小学生の頃に哺乳をした思い出の牛の姿もありました。祖父も「あと一年間は凌矢が来るまで辛抱しなきゃならないといけないなあ」と私のために体を犠牲にしながら頑張ってくれており、感謝の気持ちでいっぱいです。祖父の気持ちを無駄にしないためにも、残りの一年間酪農について学べる限りしっかりと学び、地域の方々にも愛されるような牧場を

経営していきたいです。

将来笑顔に包まれた牧場で「この町は、にぎやかだなあ」そう祖父に言われる日を夢見て。